

庭野平和財団主催 ハーヴァード大学 神学大学院 ダヴィ・カラスコ教授 講演会

応答：リチャード・ガードナー上智大学名誉教授

2018年6月3日、上智大学

新しいヒューマニズムの例

I. はじめに

本日は、カラスコ先生のご講演の応答者のお役を頂戴し、大変名誉に存じます。

まず庭野平和財団に対し『宗教と宗教学のあいだ 新しい共同体への展望』の出版と、今回の講演会を、ご支援くださったことに感謝申し上げます。

考えたらもうすぐお中元ですね。『宗教と宗教学のあいだ』の本を買って贈り物にしてもいいじゃないかと思っているのですが。……まあ、ジョークですけど。

カラスコ先生のお話に直接応答する代わりに、私は、先生の語ったテーマの具体例をいくつか取り上げたいと思います。これらのテーマの多くは、チャールズ・ロングの著書から取られています。「文化接触」「宗教的シンボルとイメージの重要性」「新しいヒューマニズム」「新しく、より意味のある共同体を創造する可能性」などです。1961年に出た「宗教学(History of Religions)」という学会誌の第一号には、「新しいヒューマニズム」と題する、ミルチャ・エリアーデの論文が収録されています。

「ヒューマニズム」と言うと、通常、ルネッサンスのヒューマニズムを意味します。これは基本的に、キリスト教のヒューマニズムのひとつの形で、失われたギリシャとローマの文化と思想を再発見したものでした。そこには、「忘れられ、失われた、少し異なる文化から、学ぶものは大きい」という思想がありました。

エリアーデが思い描いたのは、ギリシャ・ローマだけでなく、人類全体の思想、文化、宗教の歴史を学ぶ可能性でした。エリアーデは、ある意味で、人類の宗教史全体を追体験し、再体験したかったのだと思います。

新しいヒューマニズムは既に現れているものなののでしょうか？ ある意味で、エリアーデの論文からは的確な預言を読み取れると、私は思います。この50年間、研究者、芸術家、宗教者など、さまざまな人々の間で、対話や会話や交流が増えていることが、その証しだと思います。エリアーデは、「旧石器の狩猟者の体験であれ、仏教の僧侶の体験であれ、(異質な)体験が、現代文化の生活に何らかの影響をもたらさないとは考え難い」と記しています。1961年の西洋では、仏教の僧侶の体験や見地は広く知られてはならず、影響力も弱いものでした。もちろん、今はそうではありません。ダライ・ラマのことを思えば、すぐにお分かりだと思います。

「ヒューマニズム」と「新しいヒューマニズム」という用語には多くの意味があり、定義をすることは簡単ではありません。今日は、ヒューマニズムの一側面に絞ってお話したいと思います。それは、「他者の文化や宗教から学ぶものは大きい」という思想です。この思想に従えば、さまざまな文化や宗教との出会いは、互いに学び合うプロセスであるはずなのです。チャールズ・ロングの研究が示しているように、新しく、より意味深い形の人間共同体をつくり出す可能性は、二元論による対立を乗り越えたところにあるのです。「原始的と文明的」「開発と未開発」「仏教とキリスト教」「日本人と外国人」。

このような対立の図式のリストには、もちろん、ほとんど終わりがありません。カラスコ先生はロング

先生の著作を踏まえて、「もしもこのような対立から脱却できるなら、私たちは心を動かされ、洞察を得て、人間共同体についての新たな概念が開けるだろう」と示唆しています。

庭野平和財団は、「新しいヒューマニズムが機能しつつある一つの例」として取り上げられるかもしれませんが。庭野平和賞は、多様な宗教的・文化的伝統を持つ指導者に与えられます。これは、宗教共同体が「他の宗教から学ぶものは大きい」と認識していることを示す、ひとつの例なのです。

II. アジア学院

『宗教と宗教学のあいだ』の第9章には、新しいヒューマニズムの一例として、アジア学院の創立者の一人である高見敏弘のキャリアに関する、私の論文が載っています。アジア学院のホームページを検索してみてください。栃木県にある学校を訪ねてください。大歓迎されます。

満州の日本統治区域に生まれた高見は、日本の植民地主義と戦争を、身をもって体験しました。戦後、高見はキリスト教に改宗し、アメリカへ留学し、牧師になりました。その後、東京の鶴川学院農村伝道神学校で、東南アジアから来た留学生に農業技法と技術を教えるプログラムに加わりました。1972年には、パキスタンとバングラデシュで災害救援活動に参加しました。その際、異なる信仰を持つ人々が協力して働く姿に接したことにも刺激を受けて、高見は何人かの同僚と共に、1973年にアジア学院を創立しました。

学院の目標は、世界各地から集まった草の根の農村指導者たちに、農業技術やリーダーシップを教えるだけではなく、すべての参加者が語り合い、ともに生きることによって学び合える、多民族・多言語・多文化・多宗教の共同体を創り出すことです。言葉を換えると、アジア学院の目標は、新しい共同体のかたちとヴィジョンが生み出されるように、異なる文化や宗教の接触の場をつくり出すことにあります。

高見とアジア学院のヴィジョンは、基盤となるいくつかのイメージやシンボルを元に建てられています。「土とともに生き」「分かち合い」「食べること」。これらのイメージを踏まえて、高見は、すべての宗教の底には共有する宗教経験があり、それがすべての人を結びつけ得る、と指摘します。高見の著書、『土とともに生きる』から引用します。

「宗教的な経験はなにも特別なものではありません。ともに生きていく中で、自分が変わり、また周囲もともに変わっていく。この経験が宗教的な、霊的なものなのです。つまり人間がいのちを分かち合って生きること自体、宗教的なのです。」

また高見は、ともに生活することの中に、キリスト教の聖餐式に相当する宗教的経験があると指摘します。再び、高見の著書から引用します。

「アジア学院の学生たちは、違った国、違った文化圏から集まっているために、お互いのコミュニケーションがたいへん難しいのですが、その壁を越えさせるものが食べものです。食べものを一緒につくり、分かち合っていく中で、だんだんひとつの共同体ができていきます。教会の聖餐式において、主の身体であるパンとぶどう酒によって、群れがひとつにされるのと同じです。」

アジア学院の目的の一つは、全世界の人々が十分に食べられる量の食料を、自給自足できるように支

援することです。しかし私たちは、日本人の約 16%が食料不足の状態にあることを忘れてはなりません。もう 1 回同じ文章を読みましょう。「しかし私たちは、日本人の約 16%が食料不足の状態にあることを忘れてはなりません。」

1972 年に日本からバングラデシュに向かったボランティアの活動は、日本における最初の NGO になりました。以後、日本に多くの NGO が誕生し、国内外で人々を支援しています。より近年に活動を始めた NGO の一つとして、2000 年に創立したセカンドハーベスト・ジャパンがあります。日本国内で、食料を必要としている人たちに食べ物を提供しています。ぜひ、セカンドハーベスト・ジャパンのホームページを訪ねて、調べて、そしてお金を寄付してください。これはちょっと PR 活動のお話です。私はセカンドハーベスト・ジャパンの理事長ですので、ぜひ調べてください。どうか皆さんの地域のフードバンクを支援していただきたいと思います。

III. シャルトル大聖堂のラビリンス

13 世紀の始め、フランスのシャルトル大聖堂の床に、ラビリンスが作られました。ラビリンスは迷路ではなく、行き止まりや分かれ道の無い一本道です。キリスト教の言葉で言うと、中心に向かう道はエルサレムに向かう巡礼の道で、ラビリンスを歩くとは、神に近づく旅をすることです。ラビリンスは 1990 年代に、米国聖公会の牧師、ローレン・アートレスによって「再発見」されました。ラビリンスは、アートレスの紹介で、アメリカ合衆国で広く知られるようになりました。

ここで写真を紹介します。シャルトル大聖堂と、そのラビリンスの図です。もちろん、この大聖堂でラビリンスを見たら、何かキリスト教と関係があることはすぐ分かると思います。ただこの図だけを見ると、キリスト教と関係があると思う人はあまりいないと思います。シャルトルラビリンスは、中世の十一周回ラビリンスとも呼ばれています。中心にたどり着くまでに、道が 11 回、回っていることからついた名前です。もう一つ、ラビリンスの特徴として大事なのが、「迷路ではない」ということです。ラビリンスの道は入口から中心まで 1 本でつながっています。枝分かれや行き止まりはありません。中心まで行った後は、同じ道を通って戻って来ます。

これは、アジア学院の学生がラビリンスを歩いている写真です。仏教の信者もいたし、ヒンズー教の信者もいました。ネパールで地震があった時で、ネパール人の学生は、ラビリンスを歩きながら泣き始めました。歩いた後の分かち合いの時に、皆でいろいろな話をしました。

これは仏教のお坊さんがラビリンスを歩いている写真です。これは、ローレン・アートレスさんがラビリンスについて書いた本の日本語版の写真です。考えたら、これもお中元とかお歳暮で、皆さんに送ってもいいじゃないかと思っていますが。これで写真は終わりです。

ラビリンスを歩く人は、キリスト教徒だけではなくありません。自分は「宗教的」ではなく「スピリチュアル」だと思っている人たちもたくさん歩いています。さまざまな人がラビリンスに心惹かれるのは、ラビリンスが人生の旅の具体的な象徴であり、人生の道をイメージさせるからです。「人生は旅」とは、多くの人たちの心を引きつける基本的なイメージであり、シンボルなのでしょう。また、ラビリンスを歩くことは、「歩く瞑想」や「マインドフルネス」の一種として捉えることもできます。

ラビリンスは、今では、教会だけではなく、病院や、大学、公園でも見られるようになり、アメリカだけではなく世界各地に広がっています。ラビリンス・ウォークは、また、宗教間活動にもよく使われています。さまざまな宗教の信者や、「スピリチュアル」な人や、宗教を信じない人も、ラビリンスを歩いています。このようにラビリンスは、宗教宗派や信仰の有無を越えて人々が集う、新しい形の共同体のシンボルになっています。

「ラビリンスの再発見」は、二つの点で、「新しいヒューマニズム」の観念に関係していると言えるでしょう。第一に、遠く離れた文化から学ぶという点です。ラビリンスの場合は、中世のキリスト教からの学びです。シャルトル聖堂では、1990年代の前半頃には、ラビリンスをまったく使わなくなっていました。アートレスさんの活動は、本当に「再発見」の活動でした。第二に、キリスト教徒だけではなく、信仰の異なる人や、信仰を持たない人にとっても意味がある、ということが、明らかだという点です。

日本では、ラビリンスは国際基督教大学、上智大学、東京ユニオンチャーチ、アジア学院、聖霊修道院などで行われて来ました。この五月には、東京の目黒不動尊で、日本で初めての仏教寺院でのラビリンス・ウォークが行われました。

ここで、日本でラビリンスを歩いた人の体験談を二つご紹介しようと思います。具体的なイメージと象徴が、どのように、人生における変容をもたらす力を持つかを示す、例となっています。一人目は、八十代の女性です。熊本の画廊「ギャラリー楓(ふう)」が企画したワークショップで、熊本地震の半年後に、熊本市内のルーテル神水(くわみず)教会で歩きました。

「キリスト教の礼拝堂に入るのは娘のとき以来で、教会に入ってからすぐに学校で毎朝お祈りをしていたことを思い出しました。最近よく足が痛くなるので、私より前の人たちが歩き終わってから一人で中に入りました。はじめ少しヨロヨロしましたが、だんだんと歩くコツがわかって上手に歩けるようになり、足の痛みも出ませんでした。真ん中まで行き着いた時に、自然に深い息が出ました。私は子供の頃も大人になっても苦勞が多い人生でしたが、ここまで真っ直ぐに生きて来られたのは、中学・高校で毎日神様にお祈りしたからかもしれないと思い、自分の人生はこれで良かったのだと思いました」。

人生の道を外れずに生きて来られた源に十代の自分を見出し、人生全体を「これでよかった」とふりかえっておられます。ご家族によるとこのような言葉を聞くのは初めてで、その後これまではあまり語られなかった学校の話が出るようになり、数ヶ月を経ても「中学・高校で毎日お祈りしたので、私はちゃんと生きてこれたと思う」と話されているということです。

もうお一人は、上智大学のグリーンケア人材養成講座で学んでいた、四十代の女性です。

「ここを歩く事で、気づける事など、有るのだろうか？」・・・それが、初めてラビリンスを目にした時の、正直な気持ちである。 ゆっくりと歩み始めた。「ご自分のペースで」と言われていたが、どの速度が自分のペースなのかが分からない。周りのペースを気にしながら歩いた。早すぎてもいけない。遅すぎてもいけない。周りのペースに合わせよう。ただ、目の前にある白い道に沿って、前後の人に迷惑を掛けないように歩めば良いだけだ。余計な事は何も考えずに歩こう、歩ける、そう思っていた。

ところが、少しした所で迷いが生じた。「私が進んでいるこの道は、正しい道なのだろうか？」間違えてしまったらゴールに辿り着けないという不安が、突然私を襲って来た。

後ろを振り返る。でもすでに、合っているかどうかを確認する事が困難な位置に来ていた。「間違えてい

たらどうしよう？」そう思い始めたら、歩くスピードがとても遅くなった。一步一步、白いラインをしつかりと確認しながらゆっくり歩く。ゴールに辿り着けないかもしれない不安を抱えたまま、ゆっくり進む。

途中にふと現れるロウソクの光だけが、優しく私の心を包んでくれているように感じる。でも、ロウソクのそばにずっと居られるわけではない。そこを離れて、前に進まなければならないのだ。ただ歩くだけなのに、何故こんな不安な気持ちになるのか分からなかった。

そうこうしているうちに、ようやく中間地点に辿り着いた。その時、『そうだったのか！』と突然 腑に落ちた。夫を亡くした五年前のあの時が、私にとってのラビリンスのスタートラインだった事に気づいた。夫を喪ってからの私の気持ちが、中間地点に辿り着くまでの思いと重なり合ったのだ。

私の歩んでいる道は、正しいのだろうか？ 最愛の夫を喪い、幼い、我が子を抱え、どう生きていけば良いのか分からなかった。目の前が、真っ暗だった。生きている事が、苦しかった。息をしているだけで、辛(つら)かった。支えてくれる温かい人達もいたが、ずっと甘えるわけにはいかなかった。

中間地点に立った時、「これは、今の自分の立ち位置なのだ」と感じた。不安に怯(おび) えながら、時に人の温かさに守られながら、ようやく生きて行く意味を見出す事が出来た現在の自分。大きく深呼吸をした。「大丈夫。大丈夫。私の歩んで来た道は、間違いではない」その想いに心が満たされた。

折り返してからの私は、ほとんど足元に目を向ける事は無かった。ロウソクの光は必要ないと思えるほど、目の前が明るく感じていた。「私の人生は、これでいいのだ」。

ゴールに辿り着いた時、私の心は喜びで満たされていた。いつか、この肉体が終わりを迎える時、その時の私も、きっと、こんな想いで居られているのかもしれない。

この二つの感想文が語り尽くしていて、私は何も付け加えなくても良い、と思います。ただ、一つだけ言うなら、お二人とも、[人生は旅] という比喻を自然に使っています。

IV. スピリチュアルケアと実践宗教学

新しいヒューマニズムの概念を、日本におけるスピリチュアルケアと実践宗教学への関心の高まりと関連づけることもできると思います。

日本では、少なくとも太平洋戦争の終結以来、宗教はやや危機的な状況にあります。敗戦後、日本では多くの人が既成宗教への信頼を失いました。より最近では、多くの伝統的宗教団体といくつかの新興宗教団体の信者の数が減っているようです。島藺進先生は、東日本大震災が日本におけるスピリチュアルな危機をあらわにした、ことも論じています。

多くの日本人が宗教に不信感を持っている一方で、また多くの人々が、宗教的もしくはスピリチュアルな何かを求めてもいるようです。「宗教」よりも「スピリチュアル」の方がいいという人いるでしょう。人々は宗教と世俗の二元性、もしくは対立の「あいだ」にある何かを求めているのです。

2007年、日本スピリチュアルケア学会が設立されました。スピリチュアルケア学会は、病気の人や死別をした人で、心理士にも宗教指導者にもケアされていない人に、何らかの形のスピリチュアルケアが必要とされている、という認識のもとに設立されたようです。言い換えれば、人々は世俗か宗教かという対立する選択肢のもとで得られなくなっている、何かを求めているのです。

2012年、東北大学は実践宗教学のプログラムを開講しました。プログラムの目的は、宗教指導者を臨床

宗教師（チャプレン）として教育し、必要とするすべての人々にスピリチュアルケアを提供することです。宗教指導者が、異なる宗教を持つ人々や宗教を持たない人々との話し合いを通じて、訓練を受けることが望まれました。これも、日本で様々な宗教が協力し、互いに話し、新たな共同体を作って、他者を支援しようとしている事例です。

2011年、東北の大震災と津波がありました。明らかに、スピリチュアルケアを必要とする多くの人がいまいました。しかし十分な数の僧侶や牧師がいまいませんでした。また、多くの人は宗教団体に属していませんでした。そこで問題が出てきます。禅僧はどうやって浄土真宗を信じる人のスピリチュアルケアをするのか。キリスト教の牧師はどのように宗教を持たない人のスピリチュアルケアをするのか。

このような、日本における、宗教あるいはスピリチュアルな危機への対応は、新しいヒューマンイズムの形として捉えることができるかもしれません。このような危機に対応するには、異なる宗教を持つ人々が、互いに実際に会って話し、協力する必要があります。宗教指導者と非宗教専門家、すなわち医師や心理士、看護師が、一緒に話し、互いに学びあうことも必要です。

V. おわりに

先ほど、私はラビリンスについて話しました。私たちは、人生のラビリンスを共に一歩一歩一緒に歩んでいます。今日ここに集った人たちは、同じ空間、同じ時間をこの人生の旅の途中で分かち合いました。私たちの道はまた交わることがあるかもしれません。皆さんお一人お一人が、健やかに、意義ある人生の旅を続けて行かれますように。そして今日はこれで別れてばらばらになっても、私たちは実は同じ道を一緒に歩んでいるということを、どうか忘れないでください。ご清聴ありがとうございました。